

「もう絶対に戻らない。みんなも戻らない方がいいぞ」。2011年3月15日、東京電力福島第二原発の体育館で、冷たい床に座り込む同僚たちに第一原発復旧班の横山英治が言った。爆発した原子炉建屋、異常なほど高レベルの放射線量。数時間前までいた第一原発の恐しい状況が脳裏によみがえっていた。

2号機の状況悪化に伴って第二原発へ退避した復旧班員たちに、第一原発から「事態は思ったほど悪くない。3、4人戻ってきてくれ」と連絡があったのだ。

横山は事故が発生した11日以降、車のバッテリーを抱えて免震重要棟と中央制御室を何度も往復し、原子炉水位計や格納容器圧力計などを復

事故後議論で抜け落ち



東京電力福島第一原発一号機の原子炉建屋で爆発が起きた後、中央制御室に残った運転員たち（2011年3月12日（運転員提供）

止めるのは現場だ

旧させた。作業の間、爆発や燃焼への恐怖は不思議と感じなかった。

だが第二原発体育館に退避して、ようやく全面マスクを外すと、恐怖感が湧いてきたのだった。

現場要員を募る声に、同僚たちは下を向いていた。若い班員たちは青ざめてさえた。長い沈黙を破ったのは「戻らない方がいい」と言った横山自身だった。

「俺、行きます」

後輩たちを再び現場に送っては、班だけではない。中央制御室をサボ

1トする発電班、放射線管理をする保安班、技術班などが15日前から午後にかけて次々と現場に戻った。最後は自分が決死隊をやりますか

といたものがあつたと思います」

第一原発ユニット所長の吉沢厚文が、言葉に詰まってしまう。気が持たぬ、ありがたかった。15日までオフサイトセンターに詰め、なにを最終的に人の力だと周囲に話している。

「あの状況をどうやってたら打開できるのか、考えて、計画して、実践していただく。現場の人がまじっていくことだと思っ。そこが事故後の議論で抜け落ちているんだ」

従来の事故対策では、人はシステムを動かす存在と位置づけられてきた。だが今後は人材育成も大きな課題になると吉沢は言う。

「今回の事故で発端された現場力を超える高経量となっていた。戻ればもう生きて出られないかもしれない。吉沢はそう考えていた。

「背負に、使命感や地域への愛着を」